

ローマ人への手紙 第12章1節

パウロがローマ教会を訪ね互いに恵みを分かちたい願いを持ちながら果たせなかった代わりに送った手紙説教の一節です。

共に礼拝することが叶わない中で、ローマ教会の兄弟姉妹に礼拝を勧めます。この礼拝は地下教会だけに特定する必要はないように思います。むしろ、キリスト者の日々の生活と結びついた礼拝と言えるでしょう。霊的な礼拝です。日常に神を覚え、神を思い仰ぐ生活のことだろうと思います。

彼らにとって今日のいのちは保証されていませんでした。いつ国家権力が介入し、彼らのいのちに終止符をうつのかわからない日々であったと思います。そのなかで、なお礼拝への勧めです。

今日の礼拝が、今日の生活礼拝が閉ざされる日が、いつ突然襲うのかわかりません。それでも、日々生活現場を通し礼拝出来るのはローマのキリスト者にとって、励みとなり喜びとなったと想像します。

彼らの普段の礼拝生活、神を思う歩みが、やがて地下教会から出て集う礼拝の底力であったと想像します。